インタビュー

煉瓦の可能性を施工で表現し、設計者に発信していく

㈱東京ブリック社　杵塚氏、小野氏、矢尾板氏、山内氏に聞く

▲枚方総合文化芸術センターエントランス：建物の内外観だけでなく空間の間仕切りとして煉瓦が活かされている

空間や建物を彩る建材として根強い人気のある煉瓦を従来のモルタル積みだけでなく、レンガスクリーンやルーバーとして用いる事例が増えつつある。その独自の意匠性が新しいカタチを見せる中で、施工の現場ではどのような課題があるのだろう。

本稿では、㈱東京ブリック社より会長の杵塚高二氏、代表取締役営業統括の小野達大氏、代表取締役工事統括の矢尾板宏学氏、専務取締役経理統括の山内七重氏の4名に最新施工事例のほか、課題や将来に向けての展望についてお話を伺った。（編集部）

▲今回、お話を伺った小野代表取締役営業統括、杵塚会長、矢尾板代表取締役工事統括、山内専務取締役の４氏（右より）

色やデザイン、積み方など新たなチャレンジを

――煉瓦のデザインを建物に活かすポイントについて教えてください

小野：私どもが手掛けた最近の事例などを紹介しながらお話したいのですが、やはり時代とともに求められる煉瓦意匠が変わってきています。単にモルタル積みするだけでなく、空間の間仕切りとしてのレンガスクリーンが多くなってきました。

当社としては、外壁を煉瓦で覆う外断熱工法による施工を主力にしたいのですが、そうした設計ができる設計士が限られています。ところがレンガスクリーンは外壁の一部やエントランスなど部分的に使用できるので使いやすいのです。その空間を訪れた人々の目を引くデザインによって建物の価値を向上することができるのではないでしょうか。

――ここ最近の施工事例で印象的な現場はありますか

矢尾板：印象的な現場としては枚方市の総合文化芸術センターでしょうか。建物の内部と外部でおよそ10万個ほどモルタル積みをしています。また、ホール背面やエントランスの一部もレンガスクリーンが採用されて、建物全体が煉瓦に覆われているといった感じです。煉瓦のデザインも特長的で、4色の釉薬を掛けた陶器のような『かまぼこ状』の煉瓦をランダムに積んでいきました。煉瓦のサイズも4種類あるのですが、大きなもので440mm×145mm×H90mm、10kgもあって積むのに苦労しました。特に大ホールは最も高いところで6階建てほどの高さがあるのです。かまぼこ状の釉薬を塗った煉瓦を使用したのも初めてで、とても印象深いデザインになったと思います。また、これほど大きな現場でしたので、非常にやりがいのある仕事になりました。

もう一つは、煉瓦建築を数多く手掛けている大宇根建築設計事務所が設計した企業の保養所です。現場は宮城県の松島で、大宇根先生は森と海に似合う煉瓦をイメージして淡い白色の煉瓦を制作するところから始められました。保養所は、施設を利用する方々に快適に過ごしてもらいたいと、RC造の建物に発泡ウレタンを吹いてから煉瓦積みをした